



神鳳鈔について

中 田 四 朗

(1)

律令体制の基本とした公地公民制は貴族、寺社の私有地への積極営為と公民の反律令的抵抗とに対応して否定されて行った。墾田を拠点とする公地の荘園化の過程で、国家的保護の下にあった、特殊な存在意義を有した伊勢神宮の経済的な基盤も歴然たる変質をみざるを得なかった。律令制の後退は神宮経済を支える官庫の支出も不如意となつたのみでなく、神三郡も封戸として全体的な把握も困難となり、それら荘園化をもつようになつて神宮の経済を支える新たな体制に発展したものである。神戸や封戸はその律令制下においても私領的性格をもつたのである。から、これらが荘園化するに容易なものであつたが、神三郡の申においてすら封戸の把握と共に個々部落的に把握を持つといふ複雑な形態を生じたのである。神三郡内に御園や御厨の成立が存在することについての理由の明確性を求めることは困難であるが、一面からみれば神三郡内に旧神宮体制から特立した勢力が発生し、それら荘園に基盤を持つ神宮体制への再編成の過程の中で、再び御園や御厨の形で神宮領荘園化したのであり、二見傳の御園殿古文書中の「下 大神宮司 井原田手 依元例令可沙汰 祭主 太神宮司 申請 祭主裁事 調殊任官府公判

等旨 彼裁許二見御厨惣換校権休宜能範訴申 御園殿造違折田御米扶 副達 本解公判證文并不輪田注文等 行得彼能範今月日申文簡 子細載于其扶也 如申非無其謂 望請 祭主裁任 官府公判等一旦被裁許矣 理仁元年十一月六日」とあることによつてわかるように、神三郡内における個別的な地畝における在地の支配者が、平安末にその行政権の上に租米徴收権を公認されることによつて、土地私有権化をみた。その土地に対する権利を留保して、神宮領荘園体制化に入つたもので、この種の御厨や御園が神三郡内に生じたのであろう。勿論神三郡内に旧封戸以外の開墾が在地土家によつてなされ、その開墾地に対する権利を留保して、神宮領荘園下に編入したのもあつたとする。ましてや神三郡においては、その地理的に神宮と接近する所であり、このようなことは必要なことであつた。たゞ、国家的保護の稀薄化し、その期待を失ふなつた神宮の複雑な体制を保持し、煩雑な祭事、日々の供御をまかなう重要な空間としての神三郡はこのようになつた。全国的に拡大する荘園に制約された神宮はその上に各地にその荘園を積極的に拡大していった。そこには神宮神官の自己権益たる取

の獲得に因連する努力が存した。また天皇のみみ独り神官を通じて公家の安定、国民の安穩、五穀豐饒を祈りえた神官の古代的仕度の姿態があり、所謂神宮の民家化によって古代的権威が否定された。すなわち民家の私幣私符が神宮それにかゝまる神の経済を支える手段として歓迎されたのでなく、神宮そのものが民家への接近を口ひまつた。御厨や御園の発展拡大はこのような民家と神宮との交流作用によって、神宮の豊かな経済基盤を構成していった。このような神宮領荘園史の研究には可成の成果をみるのであるが、それらの研究上重要な史料としては神宮雜書、神宮雜例集、神鳳鈔、享徳方宣、大永方宣、天文方宣、天正注進文、天養記、御堀殿古文書、松垣兵庫古文書、光明寺古文書、春記、小石記、吾妻鏡、太平記、通海参詣記、長経卿引付、内宮引付、外宮神領目録、外宮給人引付等々抄本に遑まのない程であるが、神宮領荘園の研究のみでなく、地域の研究の上にも重要な意義をもっている神鳳鈔について紹介してみよう。

二、神鳳鈔改題について

由來神鳳鈔の解題については国書解題、神宮文庫五十周年記念書本字彙集、一志辰樹氏の信濃国御厨史料とその考察、国史文献解説、神道辞典などに収載されているが、最後の神道辞典の解題以外に簡單なものである。それは神鳳鈔が神宮経済史料として既に何人も知悉している故にその解説が必要であるためであろう。ところが案外にこの神鳳鈔についての内容的な検討は不十分なまゝに放置されているのであり、神宮史の構造的

な研究の上に最も重要なこの神鳳鈔について明確な知識をもつことが神宮史研究の前提として要請されねばならない。それか筆者が神鳳鈔の紹介を試みようとするオ一の意図である。すなわち神鳳鈔そのものの研究が少なうためにその本質的な把握が満足されないままにあるものを幾分ても可能な範圍に解明してきれば当時の神宮領荘園についても明確にしたいのである。オ二の意図は徳川封建下における神宮神官あるいは他の神道家国学者によってこの神鳳鈔がなぜ注目されたかを明らかにしたいためである。特に神宮神官がこれに強い関係をしち、その関係がその膨字、研究となったことか、今われわれが試みるような中古社会の基不構造であった荘園を分析する意図とは異った観点に立つていることか興味のあることである。すなわち、明和九年不居宣長字本の奥書が「石本吾大主長左京門家茂代板蔵之処、令借用之写留了、万一神領再興之時、可為龜鑑焉」といっていることか、その研究膨字は神領の後興に希望を託めたものであったのである。神宮の隆盛時の把握はかゝる神官たる彼等の将来にその再現あらんことを希望するものにつらなっていたのである。それが幕政の絶対権の下降傾斜を大なりしめて以来、特に天保期以後封建農民の土地所有形態が兩種分解を、封建制そのものの危機に類し、総百姓一揆が世直し一揆に激しく転化する頃になると、神宮の神官の幕藩下の圧迫から脱却する気運を醸成したものがあつたと思ふ。大塩平八郎と厚情岡係をもつた足代弘訓の天保飢饉における神領民の求済、吉田松陰の未訪をうけて相互に刺激をうけたであろう足代弘訓の立場が、神領研究、神領考証、庄園考、神領取草人争などの物さ

れを理由が那邊にあるかを推測しうる。また藤田守良の神領研究、御巫清直の神封通考などもそれにつらなる神領再興それは神宮の権威の復活を期望するものを内任したのである。この様な幕末の神宮神官（神鳳鈔にその自覚に肉連して）闕此をもち、その研究をなしていることも私の神鳳鈔を紹介してみようとする理由の一面をなしているのである。

三、神鳳鈔の写本について

神鳳鈔に対する神宮の関心はず研究の前提として写本がなされている。神鳳鈔の原本が散失してその所在を明らかにし得ない今日、神宮その他による写本の現存することには誠に、神宮領在國史の研究には幸である。神封通考をあらわした御巫清直が神鳳鈔原本を撰写した際によると、神鳳鈔に対する年末の闕元にもかゝわらず、流布本が、産安のため、不審が多かつたことを慨嘆し「累年探索原本千旧家而不得焉」であつた。中川経晴神主によって内宮文殿所蔵の古本を信託した所が、これこそ「所渴望之元本也」と観念せしめた。それによつて「疑帯水船不慮欣悦」と告日し、謹んで撰写したのである。しかもその撰写にあつて原形を止めんとして一日一紙を写すことによつて三十日を費す慎重さを示している。この時が嘉永六年癸丑二月十二日である。従つて嘉永六年には原本が内宮文殿に存在したのであるがその次後いひなる事情によるかその所在を今向明らみにしえないのは遺憾なことである。所が先の御巫清直の願書にみるようにその写本が原本の旧体を保存する周到さをもつたのであるから、原本を失つて今日この撰写本は誠に重要な

ものといわねばならない。

(注)「神鳳鈔流布本産安不審多々之向、累年探索原本千旧家而不得焉、與中川経宣経晴神主次内宮文殿所蔵古本按許備

闕之、則所渴望之元本也、疑帯水船不慮欣悦、謹次影撰之、但恐失古体、一日写一紙、三十日而成功了、于時嘉

永六年癸丑二月十二日

印

原本撰写の御巫清直神鳳鈔について以後に項を改めて紹介するが、さきの奥に「流布本産安不審多々」としている流布本とはそもそもいかなるものであつたであらうか。その全体を渉猟する暇がないので、現在神宮文庫本および群書類聚に収録された神鳳鈔について一瞥してみよう。後に明らかにするよう現存する神鳳鈔は悉く元本田氏経の写本を底本としたもので、御巫清直の写本とは別のものである。その底本たる氏経の写本神鳳鈔は現在神宮文庫に「善本」として自筆本が保存されている。氏経の写本の奥に口次の如くあるが、それがこの氏経本の性格を規定するものである。すなわち

本云、延文五年三月、日、本宮注進文并外宮干時一休宣晴宗

神主之本等即之書写之、注文之内朱点者建久四年二宮進官

注本自本所令合点黒点者自其次来書入云々、以泰昌神主書

写本書之、但今度皆以墨書

石は本宮注進本と外宮一休宣晴宗本に依據し、建久以後のものには泰昌神主の書写本によつたことがことを明らかにしている。このことは神鳳鈔の編せられた時点を推定するには役立つもので、氏経の叙つた本宮注進本には朱点と墨点とあつたことが明らかであり、御巫清直の書写本が原体を忠実に伝えたものであ

るみそれに付朱点 墨点を明瞭にしているから 氏経本の依つて本宮注進本というのは内宮文殿に伝承した原本であつたと思ふ。氏経は原形を保持せず朱点 墨点を「但今度皆次墨書」したのであり、このことが、清直をして「流布本趣意不審多々」と告白せしめる原因が存在するのであらう。かく考へる時御坐本の伝来は両者を比較考察するに役立つものとして貴重なものである。

(イ) 氏経本およびその系統本について

氏経本は神宮大庫蔵の善本で「譜」なるラベルをとり、桐箱の中に鄭重に保存されている。現存する神鳳鈔中最も古いものである。氏経は室町の末朗神宮一休宣として、神宮式微の中で北畠氏その他に対処して、神宮の復興を志して努力したのみでなく、神宮制度に対する造詣深い學者であつた。彼が書き残した氏経御引付や日次記などは神宮の當時を知るに貴重な史料である。彼が当時の神宮領荘園が北畠氏及び武士団の発展による神領の現実に、この神鳳鈔に開眼をまつたのは当然といわねばならない。特に神宮と古来特殊な関係を持つる旧神三郎の荘園の北畠氏による横領は重大関心事であつた。氏経御引付に「能令啓候、就其神三郎内、自在々廻々之神税上分奉事、具可注称之由、自私可申旨候、恐惶謹言」としう、北畠氏の奉行たる高柳因幡守公幸、大宮左工門走雅兼から「内宮一休宣殿」にあてた書状は、神宮の北畠氏の神三郎神領の返付願或は要求に対し、北畠氏が神宮の收納実権内にあつたものの喜上げを命じたのである。これに対して神宮は一応次の如く返事をした。

御状之趣令拜見候了、隨而神三郎内在々廻々之神税上分繁多候

へ共拾人数百人候間悉存知せず候、何れ相尋候て次注文事子細可申入候、先御使逗留下可然存候て、御返事を申候重而御左右可申入候、恐々謹言

五月（享徳二）十六日

高久（内宮一休宣）

御返事御奉行所

この時に内宮も外宮も共に神三郎は悉く神宮領荘園であることと主張したこと付注目すべきことで、外宮においては神三郎の神宮領たるべきを主張した後、既にのべた如く中古以来在地庄官たる下司、公文、刀袰等が土豪化して供祭物の貢進をせず、神事祭祀を闕如せしむるに至つた。かくる土豪勢力を自己体制化に入れた北畠氏は神宮のためその不正を治罰したもので、神の御座にかなうたものであると神宮によって感得した。従つて神忠を尽して神三郎を元の如く返付することによつて、一休宣、祠官、大小の諸役人かもしも私たる口入権を安堵し、收納権を行使して、式日の神役の勤仕が可能なるようにされたといふのである。そうすれば天下泰平の御祈禱をなし、御一門繁栄、御輩千秋万才の御祈禱を誠心誠意なすといつて付け加へたのである。勿論最後の言葉はかかる場合の神宮の使用する常套語であるが、當時の武士の権力主義的なものも神の怒りに小れることは一応注目せざるを得なかつただけに、幾分の効果はあつたものであらう。

(注)

豊受大神宮神主

注進可早候經御沙汰今月十六日任向奉行御奉書旨申之、神三郎内志兼非両宮末社、攝社等敷地、神田、然向取別注之進者

可者如任之礼之糸神思恐甚次巨測子細事石今月十六日兩奉行之
御奉書條 神三郡内自在々如々之神稅上分等可注之進之由波御
下之旨者 謹所請如件 柳神三郡旨往昔以來為内宮五十三社
外宮八十八社之末社 其社等之敷地 神田兩宮年中繁多式日之
神事祭物等為令備進在所之処 中古以來彼諸神内之下司 公文
刀祓等恣一旦之依估而動者神役勤仕之輩 百度之祭物令不足
之向神事 祭礼之儀式皆如在之法之処 果只今蒙御治罰之系
併神處之至歴然者哉 然早以御神忠之儀 惣神郡如元新預御寄
附者 祓宣 祠官 大小之諸役人等令案(文) 盾于各々神田之
口入所 以神宮催役令微御 羣式日勤仕時 天下奉平御祈禱者
弥御一門繁求 御運千秋万才之御祈 可奉旋攝誠之慈母矣
仍注進言上如件 以解

享德二年五月 日 大内人正六位上度会神主弘富

(外宮祓宣十人加署)

内宮の注進も内容的に口同一のものである。

室太神宮神主

注進就无度兩奉行御奉書旨 神三郡内神稅上分近代不法懈怠
在所 柳任神宮本引付而如元可被加御成敗由事

副進 一卷神宮旧領注文少々

石去五月十六日兩奉行御奉書之面謹所請如件 概之看旧記泰

天照皇太神奉始御假料 十一所別宮并式内 式外末社年中毎祭
之時迄至御候所 柳神三郡 葉子以下神前係進之具定
折物迄至々所々神前 御祈 御祈毎年上分物 取分於神三郡
内雖有教多 近年以來不庇神宮催役 依無沙汰 失祭礼之日時
御候 御神酒色々之供物不備可備 毎年阿之之儀併為御祈禱
導進 如此被御尋下之系 偏御神柳之時代令用取才 御祈禱

之舉一同事如之哉 然同近代神宮祓宣 祠官并大小内人等
知行催役之在所之上分 大概注上者也 嚴密被灰下御下知 如
往古被返付神宮上分旨 奉簡式日神前供用物為舉 天下奉平
武運長久御祈禱之忠勤矣 仍以解

享德二年十一月三日 大内人正六位上荒木田末久

(内宮祓宣十人加署)

その時の「三郡内神稅微納注」の一部を示してある。

一、一杯宣代々知行分上分 飯島神戸白石米太神宮御候折当
時沢方依押領近代一円不領(沢氏と口大和国宇陀地方に
根據をもつてこの地域にまで発展していた。)

一、佐服 土羽神師跡上分 同沢方代官依押領自当年不致沙
汰

(中畧)(十一ヶ条)

一、子良田山神柳内松本上分田一段三文 棚橋殿御知行御代

官第瀬方

一、同子良田名多越一反 四斗代五斗代棚橋御代官藤左工門方

三ヶ年押領

一、同子良田矢野内栗本一反五年分御代官押領

一、同子良田敷野五段 此内一反原之孫庄之左工門太郎作

(以下十一ヶ所畧)

石注文有注漏在所而致訴訟出来祠官重可注進也

享德二年十一月 日

長日御祈禱之事於神前奉致懇誠候 兼又去夏比神稅上分不法
之在所 以注文可申上候由祈兩奉行御奉書候 就可致注進候処
神官役人本處因二在宅共候之同一さ右相符 于今遅々仕候

其恐不少候 先大抵望申通以主文申上候 無相違候之林可預申
御沙汰候 仍為御祈千度御返 大麻煩一合 又輕微之至隣入候
へ共對斗千本進上仕候 次此旨可預御披露候 恐々謹言

十一月十二日

内宮一休宣滿久判 進上 御奉行所

右の抄分儀勢の中で 神三郎といえども武士勢力から奪回すること、実力を乏しな神宮は不可能なことで、唯神の權威を前面におし出す以外に方法はなかつた。北畠氏は在地土豪を自己の假官化することによって、その土豪の土地に対する權利を留保して、自己控制を推進した以上、神宮の權威も空文的であつた、なほる現實を打開する勢のために旧神宮領莊園の實際を把握する必要があつた。そこに氏経が神鳳鈔を書寫した理由があり、氏経神自筆神鳳鈔はなほる神宮の立場を反映したものである。

氏経は墨付才亮丁の石下に 荒木田御主氏経 なる角朱印をもっている。このことと丁この字が假の自筆本であることを証する墨迹的なものである。所が現存する流布本は前記の氏経本の奥の次に「氏経」と書して、氏経本を底本としたことを語っている。これについて考察してみると、氏経本には何人か付紙したか不明であるが、右の如く流布本には奥書の所に「氏経」とあることについて「流布之本皆此所に氏経の署名あり、然して此原本には名を欠けり、更に一本あるものか、可考」といつている。これはこの言の如く氏経の奥書の所に署名のある氏経自筆本が別に存在したものでない。その理由は現存氏経自筆神鳳鈔が「荒木田御主氏経」なる角朱印があるものと、そのまゝ寫本にする用意をせず、氏経自筆本たること

が明確な故に、書寫した後人か奥書の所に「氏経」と署名したのである。若し本人が署名したとすれば、単に「氏経」とけ書みず、形式を整えた署名をするのが普通と思ふからである。

さきの氏経自筆本と認められる神鳳鈔はその字体を具さに検討すると現在残されている氏経自筆の「氏経御引付」と全く同じものであることもそれを裏書するものといつてよい。氏経が朱点・墨点を「但今度皆以墨書」したか、それが後の寫本の底本として流布したのである。また氏経本を書寫した徳川時代最初のものは、慶安三年十月十八日書寫了、というもので「石本看大主長左工門宗茂教代振威之処、令借用之字留了、乃一神領再興之時可為龜鑑歟、但此本内宮一休宣從三從氏経御相伝之故外宮神領頗有遺漏歟、猶可考之而已」とあるが、神宮神官の何人によつて書寫したものと不明であるが、寛文期に神宮領役・治數領をしたこと、関連して、すでに初期において神領研究による神官の自覺の露微がみられる。この慶安三年書寫本が流布本になったことは群書類聚本その他にこの奥書をもつことと自明である。それを更に寫したものと早いものは「神鳳鈔詳載吾神宮對戸、尉國之名称而旦注貴輪之尊教矣、以其夢與字之謹奉納、豊宮崎文庫記、天保四年九月十日、太神宮權林宣正五位下荒木田御主盛際御」との奥書のあるものである。元禄八年には荒木田守夏の書寫本のあつたこと、以元禄八年九月十日宣從四位上荒木田守夏神主書寫之本校合了、牛時明和八年壬辰二月二十六日」と奥のある神鳳鈔がわまる。次に「林崎文庫」なる長方形印と方形印とをもっている神鳳鈔があるが、その奥には「明和八年辛卯十二月騰寫之、權林宣從四位上荒木田

神主経雅 以元禄八年九月十日祔宣従四位上荒木田守夏神主
 書之本校合了。干時明和九年壬辰二月二十六日」とある。経雅
 は内外兩儀式帳解の著者として、その学識が認められている。
 そしてこの神鳳鈔には御厨や御園に關する注記があるが、それ
 について「石朱書者石桑師監宣生空田章所書也。以向反之本
 写之。安永三年二月十一日。石青筆者三重郡吉田柳柴田郷内姿
 本村古谷久諸益長所諸也。安永三年三月十一日記之」とある。
 また慶安三年神鳳鈔は本居宣長も書寫したことが、本居大平
 の書寫本によつて明らかで、「明和九年壬辰十一月十日書寫終
 本居宣長判」とあり、「神田作ネ門 御園作御厨 御厨作御尸
 以尚切」と畧字を使用したものである。しかし現在その所在が
 不明である。本居大平はその本居宣長書寫本を底本とし、更に
 中川経雅本を以て校合し、異なる所は紫字で加筆している。この
 書寫体もその所在が不明なるも、大平書寫本を、堀内玄坂が書
 寫したその奥で明らかである。

(注) 右神鳳鈔一卷以師本居大平之本書寫畢

天明七年丁未正月二十六日 稻憲大平(花押) 同三年箇中
 川神主君 皇大神宮祔宣荒木田経雅神主干時正四位上所蔵之
 本校合之 具異者以紫字書加之 具本卷末云 以元禄八年九
 月十日祔宣従四位上荒木田守夏神主書寫本校合了 干時明和
 九年壬辰二月二十六日(前掲により下畧) 天明七年丁未三月
 二十一日 稻憲大平

文政九年丙戌三月以本居大平大人家本写之畧之 堀内玄坂
 右の條に神宮文庫に於て經雅の書字神鳳鈔を所蔵しているが、
 その最初の底本は氏経自筆本であり幕末におけるこれを研究は

幕府の勅搖を機会に神領復活歎願に手を發展せしめたのである。
 以下神鳳鈔の成立年代やその内容についての紹介を続けなけれ
 ばならないのであり、そのためには御巫清直の模写本を以て検
 討してしまわなければならない。これに關しては次号に報告を仰する。
 原典をなすだけ多くあげたが、これに地方にいる平業生諸氏の
 ために便したことを許されたい。
 (本 学 教 官)